

## 「資料横断的な漢字音・漢語音データベース」における 原本情報確認の必要性

佐々木 勇

(受理日二〇二四年十月九日)

### 〇、「資料横断的な漢字音・漢語音データベース」が目指すもの

「資料横断的な漢字音・漢語音データベース」(以下、本データベースとも呼ぶ)は、漢字音・漢語音の史的研究の基礎資料として、「平安・鎌倉期〜近世までの文献資料に現われる漢字音・漢語音を、字音注記(仮名注、声点、節博士、反切、類音注等)に即して検索可能とする」(資料横断的な漢字音・漢語音データベース)(Database of Historical Sino-Japanese Readings)のホームページより引用)データの提供を目指す。

このデータベースは、19K00650「資料横断的な漢字音・漢語音データベース構築・公開に向けた基礎的研究」および22H00665「資料横断的な漢字音・漢語音データベースの拡充と運用に向けた基礎的研究」の支援を受けている。本稿の筆者も、この研究分担者の一人として、19K00650と22H00665とに亘って、データベースの作成に拘わっている。

### 一、「資料横断的な漢字音・漢語音データベース」に必要なこと

#### 1. 本データベース対象資料の選定

日本漢字音を記した古文献は、大量に現存している。

その膨大な言語史料から、漢字音・漢語音研究に有効な資料を選定し、漢字音・漢語音研究資料として位置づけねばならない。

#### A. 多くの古文献を閲覧した先人の選定資料を重視する。

有効な資料選定のため、まずは、多くの古文献を閲覧した先人の選定資料を重視したい。具体的には、左のごとき諸資料である。

○沼本克明『平安鎌倉時代に於ける日本漢字音に就ての研究』(一九八二年、武蔵野書院)の六五〜七五頁に挙がる諸資料。  
古辞書であれば、左のものが参考になる。

○川瀬一馬編『古辞書叢刊』、中田祝夫編『古辞書大系』などに複製された古辞書。  
○西崎亨編『日本古辞書を学ぶ人のために』(一九九五年、世界思想社)に採り上げられた古辞書。

○訓点語学会編『古辞書研究ハンドブック』(二〇二四年度内刊行予定)に採り上げられた古辞書。

#### B. 複製本・インターネット公開画像から選定する。

重要文献が複製本として公刊され、インターネット上での画像公開がなされている。

一例として、近年の日本語史研究での活用例が少ない、中世語資料・東京国立博物館蔵重要文化財『塵袋』を挙げる。東京国立博物館蔵『塵袋』は、左の

複製本が出版されている。

○正宗敦夫編纂校訂『日本古典全集』第五期第十二・三（一九三四・五年、日本古典全集刊行會）。

○山崎誠編『印刷自筆本重要文化財産袋とその研究』（一九九八年、勉誠社）。

これらに先立ち、山田孝雄が本書に注目し、一九一七年に珍書同好会の名で翻刻出版した。その序には、「本書著者明ならず著作年代も詳ならずといへども文永弘安の頃の書となるべしと春村の序にいへるは首肯すべき説なり」「国語学の方面より見れば、卷十にある「アナカシコ」の説明の如きは下学集の同じ語の説明に比して、その正しきこと霄壤の差あるのみならず、実に、当時の学問の程度室町期の暗黒時代に比して数等の上位に置せることを證せるものとす。」等と記されている。

漢字・漢語への豊富な振り仮名・声点・反切等は、鎌倉時代成立時の姿を反映している（①。永正五年（一五〇八）高野山の学僧印刷（一四三五）一五一九）書写本として貴重であるとともに、漢語についての解説は、現代の漢語研究においても参照されるべきものと考えられる。この『塵袋』は、東京国立博物館「デジタルライブラリー」で精細画像公開された<sup>②</sup>。

『類聚名義抄』『色葉字類抄』の複製本も、早期に刊行されたため、国立国会図書館デジタルコレクションで公開されている。また、『雑字類書』（文明本節用集）は、全頁カラー精細画像を、所蔵者である国立国会図書館が公開している。いずれも、二〇二二年末から、国立国会図書館デジタルコレクションにて、「高解像度」画像がダウンロード可能となった。

また、インターネット「宮内庁書陵部収蔵漢籍集覧——書誌書影・全文影像データベース——」でも、多くの参照すべき文献の精細カラー画像が閲覧可能である。二〇二三年八月に更新された「宮内庁書陵部収蔵漢籍集覧」で、「音義」を「書誌」キーワード検索すると、左のごとき文献画像が公開されていることが知られる（簡略化して、一部を挙げる）。

- 四分律音義 平安初期写本 一軸（函架番号：305・10）。
- 文選 卷第十九卷首 康和元年（一〇九九）写本 一軸（函架番号：312・44）。
- 一切経音義 大治三年（一二二八）寫本 七帖（卷三至八）（函架番号：359・29）。
- 春秋経傳集解 文永四年（一二六七）・五年寫 三十卷（函架番号：350・1）
- 文集 卷第三 元亨四年（一二三四）寫本 一卷（函架番号：305・11）
- 老子道德經 室町時代写本 二冊（函架番号：356・38）

などがヒットする。

これらは、モノクロ複製本のみが存したもの、あるいは、書陵部に閲覧申請しない限り目にするのができなかった貴重書である。

### C. 所蔵機関等の目録・展覧会図録から選定する。

漢字音・漢語音研究に有効な古文獻は、寺社に伝承されているものが少なくない。本データベースでは、その中で、影印本等で原本の状態を知ることができるとを優先して、対象文献を選定した。

寺社以外にも、対象文献は保管されており、その情報が公開されている。ここでは、京都国立博物館の例を挙げる。

○京都国立博物館編『古経圖録・守屋孝蔵氏蒐集』（一九六四年）。

○京都国立博物館編『京都国立博物館蔵品図版目録』（一九八三年）。

右の目録記載文献には、字音点本も含まれる。また、インターネット「京都国立博物館 館蔵品データベース」でも、画像の一部を見ることが出来る。

その他、県市町村等の文化財指定品にも、漢字音・漢語音資料となるものが含まれる。これらも、各教育委員会のホームページ上に情報が存する。それらの言語文化資源としての価値を正しく公表することは、言語史研究者にしかできない地域貢献である。

### 2. 資料横断的な漢字音・漢語音研究が可能となる項目を立項すること

本データベースは、以下の三点を重視し、各資料の音注を位置づける。SHOOG65「資料横断的な漢字音・漢語音データベースの拡充と運用に向けた基礎的研究」申請書の「概要」から要約抜粋する。

- (1) 古代から近現代までを貫く時代の通観性。
- (2) 漢文資料、和文資料、声明、悉曇、古辞書、音義など位相的な多様性。
- (3) 漢字音と漢語音とを対照可能とする。

この三点を備えるデータベースとするため、対象文献を時代順に分け、位相的に多様な文献の漢字音・漢語音データを、単字と漢語との列を持つ字音表として公開中である ([https://dhsir.waseda.jp/?page\\_id=14](https://dhsir.waseda.jp/?page_id=14))。

各文献について、現在は、以下を立項している。

- A 資料番号・B 資料名・C 資料内漢字番号・D 資料内漢語番号・E 単字・F 漢語・G 漢語内位置・H 読み・I 単字長・J 声点・K 声点型・L 仮名注・

M 仮名型・N 反切注・O 類音・P その他の注・Q 出現位置・R 備考

### 3. 漢字音・漢語音データの原本における確認を可能とすること

本データベースは、各資料担当者の手入力であるため、入力者の音注認定上の誤り、単純な入力ミス等を避けられない。それゆえ、データベース利用者に本データベースのデータに対する不審が生じた場合、データベース利用者が原本に戻って確認できるように漢字音・漢語音データの原本における所在を示している。

なお、本データベースは、紙に印刷された従来の漢字索引・漢語索引・分韻表の検索を容易にするだけのものではない。従来の索引類では、様々な制約から、当該字音・漢語音を原本の文脈に戻すことに限界があった。最も大きな制約は、紙面の大きさと紙幅の制限である。特に、空白ができる分韻表では、漢語単位で掲出すれば紙面・紙幅が何倍にもなるため、単字掲出にするしかなかった。用例所在も、所在巻や紙数・頁数を示す程度に留めざるを得なかった。

しかし、データベースには、この制約が無い。原本のテキストデータや原本画像とリンクさせることで、データベース利用者が、当該の漢字音・漢語音を原本の文脈において確認することができる。現状では原本画像とリンクできない文献についても、いずれの文のどの位置における例かを特定できるように、複製本の用例所在を表示している。これは、当該字音・漢語音が存在する文脈の観点から、位相的に多様な漢字音・漢語音研究に必要なためである。

そのため、対象文献の選定に当たり、複製本やインターネット上で原本の様子が確認できることを優先した。

## 二、原本情報確認の必要性

原本確認は、文献に基づくすべての研究において、欠くことができない。

ただし、原本閲覧困難な文献も存し、また、すべての研究者が原本に触れることは、原本保存上、望ましくない。そのため、複製本が公開されてきたのであり、インターネットにおける画像公開も急速に進んでいる。

原本はどのような紙であり、どのような字体<sup>(3)</sup>で、漢字のどこに、いかなる形式で音注がなされているのかを知ることが、漢字音・漢語音の位相論的な研究に必要不可欠である。

そのため、複製本やインターネット上で画像公開されている資料を本データベースの対象資料として選定していることは、前述のとおりである。

しかし、本データベース作成者は、できる限り、原本調査をすることを心がけている。本節では、複製本・インターネット公開画像および原本のそれぞれについて、具体例を挙げつつ、原本情報確認の必要性を述べる。

### 1. 複製本

複製本使用上の注意点については、すでに左の諸論考を公表しており、いずれも、広島大学学術情報リポジトリにて公開中である。

- a. 佐々木勇「二戸麻砂彦著『節用文字の音注研究』(『日本語の研究』12-3、20160710)。(佐々木 (2016a))
  - b. 佐々木勇「古典複製本使用上の注意」(『論叢 国語教育学』12号、20160731)。(佐々木 (2016b))
  - c. 佐々木勇「今なぜ古文獻の原本調査が必要か」(『日本語学会2016年度秋季大会予稿集』2016.10.09)。(佐々木 (2016c))
  - d. 佐々木勇「三巻本『色葉字類抄』前田家本複製本使用上の注意」(『論叢 国語教育学』第19号、20230731)
  - e. 佐々木勇「書陵部蔵『新撰字鏡』天治元年写本の原本と複製本」(『論叢 国語教育学』第20号、20240731)
- 右 a-e に記したとおり、新しい複製本のほうが良い、とは一概に言えない。本稿では、当該文献の索引における誤りを含め、さらに別資料の例を追加する。

#### A. 承暦本『金光明最勝王経音義』

この著名な音義は、複製本が三回刊行されている。

- ①『金光明最勝王経音義』(一九五九年、便利堂)。モノクロ・コロタイプ印刷。
  - ②『金光明最勝王経音義』(一九八一年、汲古書院)。カラー印刷。
  - ③『金光明最勝王経音義』(一九九六年、汲古書院)。右の第二刷。洋装版。
- ①には小松英雄作成の本文和訓索引・書入和訓索引・書入字音索引、②③には築島裕作成の和訓索引・字音索引が付されている。それぞれに特徴があり、有用である。

ただし、完璧な索引は無い。小松の索引には、声点の落ち(ハ可流(ハウ))・

宇奈自（四ウ4）など）等があり、築島の索引にも、声点記入の誤り（加字婆之（上上上東）（3ウ3）を（平平平東）とするなど）等がある。



（3ウ3）

研究者は、影印を見て、索引の誤りを訂正できる。しかし、学生たちは、自分の目を疑うかもしれない。また、両索引の認定が異なる場合もある。



（4ウ1）

宇礼不 平平上 ①小松索引。  
宇礼不（平□上）②③築島索引。

右のように認定が分かれるのは、「礼」の平声位置が虫損で、複製本では声点を確認できないためである。本稿の筆者は、原本調査により、「礼」に平声点の痕跡を確認した。

データベース化の際は、複製本での不明点を原本に当たって確認することが望ましく、本データベースではそのように努めている。

## B. 保証本『法華経单字』

保証本『法華経单字』は、小倉肇『日本呉音の研究』（一九九五年、新典社）においても、日本呉音を記した音義の嚆矢として、Aの記号が与えられている。この小倉（一九九五）は、「貴重図書影本刊行会（1993）」により古辞書叢刊（別巻193、雄松堂書店）の影印本を適宜参照した。なお、古辞書叢刊本の朱声点については、それが明らかに脱落していると認められる箇所が少なからずあるので、注意を要する。（21頁）として、貴重図書影本刊行会の複製本を優先している。

本資料における古辞書叢刊複製本の朱点については、しばしば注意が促され

たところであり、佐々木（2016）でもその若干例を挙げた。貴重図書影本刊行会複製本は、朱を後から被せていないので、声点の正確な加点位置と形とを見て取ることができる。

とはいえ、貴重図書影本刊行会の複製本はモノクロ印刷であるため、虫損部などに、判然としない点が残る。たとえば、

- ① 貴重図書影本刊行会
- ② 古辞書叢刊



（3オ1）



右例反切上字左の「坐」の平声点が双点であることが、①貴重図書影本刊行会複製本ではなんとか確認できる。この複製本に依った島田友啓『法華経单字漢字索引（古字書索引叢刊）』（一九六四）は、二点を認めている。

しかし、②古辞書叢刊複製本では、朱点一点のみを加点する。小倉（一九九五）の資料篇「法華経音義掲出字对照表」でも、「坐<sup>平</sup>」（34頁・0058）として、複点であることを示す「・」を（平）の上に打っていない。

この反切上字左の「坐」への声点は、虫損とにじみのために認定困難である。本稿の筆者は、「坐」に双点が加点されていることを、原本を目視して確認した。

## 2. インターネット公開画像

インターネット公開画像使用上の注意についても、既発表a～eの中で触れるところがあった。本稿では、既述以外の二文献について記す。

### A. 文明本『節用集』

『日本国語大辞典』の「辞書」項目に「文明」の略称で採用されているこの辞書は、中田祝夫『文明本節用集研究並びに索引』（一九七〇年、風間書房）、同改訂新版（一九七九年、勉誠社）で研究が進められて来た。『日本国語大辞典 第二版』も、中田の編著に依っている。

現在、原本所蔵者である国立国会図書館は、本書を箱書『雑字類書』の書名で、『国立国会図書館デジタルコレクション』にて全頁カラー画像公開している（請

求記号:WALS21)。今後は、この公開画像で研究が進められることであろう。  
この『雑字類書』(文明本節用集)には、原本に錯簡が存した。この錯簡を、中田祝夫(一九七〇)はあるべき姿に戻して頁番号(226-231)を振っている(ただし、中田(一九七〇)にこれについての記事は見出せない)。

しかし、二〇一〇年に国会図書館が撮影し、二〇一一年に公開していた画像は、原本のままで、錯簡を修正していなかった。この点を、国会図書館に報告したところ、現在は、「書誌情報」に「電子化時の注記」として、「錯簡のため別機器で撮影(117-119コマ)(2023-6-29)」と書き込んでいただき、117-119コマに別画像が挿入されている。

このような錯簡などに気づいたならば、画像利用者は画像公開者に報告し、言語資料としての本来の状態に戻す努力をすべきである、と考える。

なお、本資料に基づく研究は、語彙索引を備えた中田祝夫(一九七〇)に依拠して進展してきた。現在、イート部までの検索は、「辞書語彙データベース」<https://jisho-goikojisho.com/>に依つても可能である。「辞書語彙データベース」の検索結果所在は、「国会図書館デジタルコレクション公開画像におけるコマ数・行数・行内出現順」で示される。従来の研究と連続させるため、中田(一九七〇)の索引で使用された「影印写真のページ」欄も「辞書語彙データベース」の検索結果所在に設けることを希望したい。

**B. キリシタン版『落葉集』**

『落葉集』は、「本篇」「色葉字集」「小玉篇」の三部構成である。

福島邦道「キリシタン版落葉集解説」が、「本篇」に集められた字音語は、節用集類を凌駕している。「キリシタン版落葉集」勉強社文庫21(一九七七年)所収とすることく、漢字音・漢語音研究からも、注目される辞書である。

本書も、「本篇」に限って、「辞書語彙データベース」で検索可能である。Gallicaの公開画像および『日本国語大辞典』の当該語項目へのリンクも用意されており、有益である。

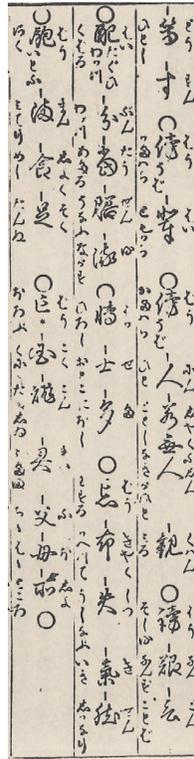
ただし、『落葉集』諸本間の異同の問題が有る。

土井忠生「落葉集解題」(『慶長三年耶穌會板落葉集』(一九六二年、京都大學國文學會)所収)が三七頁に挙げた例から、13頁(5オ)3~5行目について各本画像を引用する。

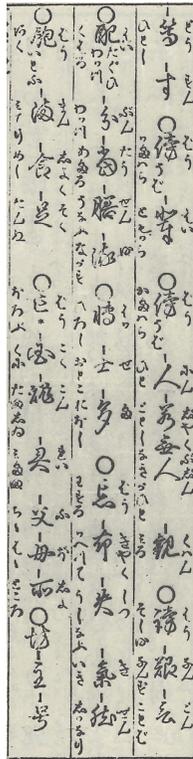
(13頁(5オ) 3~5行目)



①「パリ本」

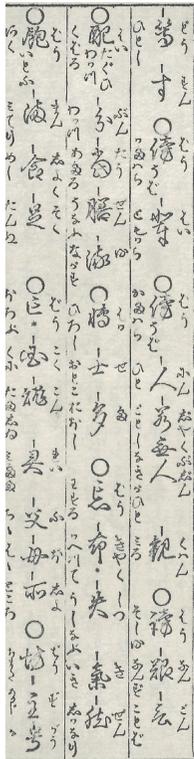


②「耶穌会本」



③「ライデン本」

大英図書館本もほぼ同じ



④「天理本」

Gallicaが画像公開する①「パリ本」には、画像一行目(原本三行目)下「謄(一)難」から二行目の「(一)配流」までが無い。②「耶蘇会本」③「ライデン本」④「天理本」と比較しても、右引用画像三行目下方の本文は、「パリ本」といずれも異なる。このような場合があることを、「辞書語彙データベース」の凡例にわかりやすく書いていただきたい。

また、漢字音・漢語音の研究者は、データベースの対象が「小玉篇」まで広がることを期待している。

なお、広く知られるとおり、パリ本とライデン本は、「小玉篇」を欠く。

したがって、Gallica 公開画像には「小玉篇」が無い。

「色葉字集」「小玉篇」をもデータベースの対象とし、「小玉篇」の画像ともリンクしていただけると、「辞書語彙データベース」はさらに有益なデータベースとなる。

### 3. 原本

複製本・公開画像でもなお不明の点が残し、原本閲覧によってその不明点を解決できる可能性が存するならば、所蔵者に原本閲覧を願ひ出るのが良い。

ただし、本を光に当てれば僅かであっても本は劣化する。原本所蔵者に閲覧させねばならない義務は無く、原本所蔵者は、閲覧対応によって時間を奪われることになる。原本閲覧は、資料保全と学問の進歩との二者の均衡の上に、成立する。原本閲覧者は、それを良く理解し、原本閲覧によって知られたことを原本所有者に報告すべきであるし、論文やその元となる資料・データを公開することが望ましい。

本データベースで2001-01の番号が与えられている根津美術館蔵『大般若波羅蜜多經』の字音点は、根津美術館において原本調査させて頂いた。この原本調査によって、墨点と朱点との前後関係や紙背注の本文対応箇所を確認することができた。本資料については、いくつかの論文を公表している<sup>(4)</sup>。

また、異音直説資料として著名な高知県安田八幡宮蔵『大般若波羅蜜多經』は、東辻保和(安田八幡宮蔵大般若波羅蜜多經の音注(資料))<sup>(5)</sup>「調点語と調点資料」44、(一九七一年六月)に依って研究が進められている。しかし、この翻刻は、各巻内における用例の位置が不明確であり、疑問の残る調点も存する。そこで、原本調査をお願いし、問題の解決を試みている途中である。全巻の調査が完了次第、原本によって知られたことを安田八幡宮に報告すると共に、学界共有の

財産とするため、本データベースに組み込むことを考えている。

『大般若波羅蜜多經』のような仏典における原本所在は、「SND」大正新脩大藏經テキストデータベースの所在を示すことによって、諸本による経文同一箇所漢字音・漢語音研究が可能となる。本データベースで公開中の根津美術館蔵『大般若波羅蜜多經』字音点の所在は、SNDの所在で示した。高知県安田八幡宮蔵『大般若波羅蜜多經』字音点の調点所在表示も、同じ方式を採用予定である。

### 三、本データベースと他のデータベースとの連携

原本における情報、特に原本におけるデータの所在を示すことで、本データベースは、他のデータベースと繋がることができる。

#### 1. 「SND」大正新脩大藏經テキストデータベースとの連携

漢字音・漢語音データベースの仏典における用例所在を「SND」大正新脩大藏經テキストデータベースの所在で示す、あるいは、SNDの所在も追加することによって、用例前後の文脈を詳しく知ることが出来る。

日本における過去の経文読誦音は、仏典の当該字・漢語の解釈に際しても、参考になるはずである。

#### 2. 「JapanKnowledge」(ジャパンナレッジ)との連携

本データベースは、「JapanKnowledge」コンテンツである大漢和辞典・新選漢和辞典 Web版・字通・日本国語大辞典・角川古語大辞典などの掲出字・見出し語とも、連携可能である。

たとえば、日本語学研究者が多く参照する『日本国語大辞典 第二版』の「発音」「辞書」表記欄と連携すれば、日本国語大辞典の利用者にとっても、漢字音・漢語音の研究者にとっても、有益である。その際も、用例の文脈が必要である。

#### 3. 「平安時代漢字字書総合データベース」との連携

本データベースのE単字・F漢語をキーに、「平安時代漢字字書総合データベース」<https://hdic.jp/>と連携することができる。

これによって、本データベースで知られた漢字音・漢語音が、たとえば『類

聚名義抄』における掲出字注文全体中の、どの位置に有る音注と一致するのかわかることができる。

#### 4. 「古記録フルテキストデータベース」等との連携

東京大学史料編纂所が提供する古記録フルテキストデータベース・古文書フルテキストデータベース・平安遺文フルテキストデータベース・鎌倉遺文フルテキストデータベースなどのデータベースとも、本データベースは連携可能である。単字・漢語を連携させれば、古記録等での類似文脈における当該漢字・漢語の読みが知られる。また、同語と思われる同一一字または同一文字連続の音形あるいは声調が異なることが本データベースによって知られ、それらがかつては別語であったことが判明する場合もある。

#### 5. 「辞書語彙データベース」との連携

「辞書語彙データベース」と連携することで、本データベースにおける漢字・漢語の音と和訓との関連を知ることができる。この時にも、原本の当該文脈における音を限定することで、その音とある和訓との結びつきについての研究が可能となる。

右にいくつかの例を示したように、単字・漢語情報と出現位置情報とをキーに、漢字・漢語、辞書、仏典、漢籍、国書等のデータベースは、繋がることのできる<sup>(5)</sup>。

連携したデータベースをも利用し、研究を深めるためには、当該字・漢語が使用されている文脈情報が必要である。そのため、本データベースにおける所在表示は、原本における当該箇所を特定できるようにしている。

### 四、むすび

以上、本稿では、本データベースにおける原本情報確認の必要性について述べた。

この原本画像の確認は、データベース作成者と利用者との双方で必要である。この原本情報の確認は、複製本や公開画像によってでもかまわない。しかし、データベース作成者は、原本そのものを閲覧する必要がある場合がある。

本稿で述べた理由から、歴史的言語資料のデータベースは、原本の画像または翻刻の該箇所を容易に確認できるように構築すべきである。

そして、漢字に関するデータベースの原本情報を確認するためには、被注字(E単字)と出現箇所(Q出現位置)の情報が必要である。

この、単字と出現箇所とをキーとして、古辞書・漢語・仏典・漢籍などのデータベースは繋がることのできる。漢字音・漢語音を当時の言語生活の諸相に位置づけ、言語生活史として研究することによって、漢字音・漢語音研究は、より確かな広がりや重層性をもつて大きく進展する。

### 【注】

- (1) 木村紀子「塵袋の中世—言語意識をめぐって—」(『国語国文』5008、一九八一年八月)、参照。
- (2) なお、本稿の筆者は原本未見であるものの、高野山大学図書館に『塵袋』の鎌倉時代写本が所蔵されていることを萩原義雄先生からお教え頂いた。
- (3) 石塚晴通「コディコロジーより見たる高山寺本」(『高山寺経蔵の形成と伝承』(二〇二〇年、汲古書院)、所収)、同「コディコロジー(文理融合型綜合典籍学)の実践」(『資料論がひらく軍記・合戦図の世界』(二〇二一年、勉誠出版)、所収)、参照。
- (4) 佐々木勇「根津美術館蔵春日若宮『大般若波羅蜜多經』における注記・注文および調点の概要」(『根津美術館蔵「春日若宮大般若經および厨子」調査報告書』(二〇一八年三月、国際仏教学大学院大学日本古写経研究所)所収)、同「根津美術館蔵春日若宮『大般若波羅蜜多經』の字音点について」(沖森卓也編『歴史言語学の射程』(二〇一八年十一月、三省堂)所収)。
- (5) 高田智和「外部データベースとの接続可能性」(日本語学会2024年度春季大会・ワークショップ4(2024年6月2日)「資料横断的な漢字音・漢語音データベースの公開と活用可能性—2024年度版の改訂に伴って—」予稿集、所収)、参照。

### 【附記】

本稿は、二〇二三年三月四日に開催された研究会集「古辞書・漢字音研究と

データベース2022」における発表「文献資料から見たデータベース構築と活用  
の注意点——古辞書・音義を例に——」に基づく。この発表の一部は、改稿  
の上、佐々木勇「三卷本『色葉字類抄』前田家本複製本使用上の注意」(論叢  
国語教育学」第19号、二〇二三年七月) および同「大般若波羅蜜多經」読誦音  
史上における真興の音注」(訓点語と訓点資料」第23輯、二〇二四年三月)と  
して論文化した。本稿は、それ以外の部分を論文化したものである。

なお、研究会「古辞書・漢字音研究とデータベース2022」は、「辞書語彙デー  
タベース」作成グループとの共同開催であり、「古辞書・音義を例に」という副  
題を付けたため、本稿における挙例も古辞書・音義の例が多くなり、「辞書語  
彙データベース」作成グループへの要望・期待を記すこととなっている。

The Necessity of Confirming Original Text When Creating and Using the "Database of Historical Sino-Japanese Readings"

Isamu Sasaki

Abstract : In this paper, I describe the necessity of confirming original information in "Database of Historical Sino-Japanese Readings." Confirmation of the original image is necessary for both the database creator and the user. The original information may be confirmed by a copy or a public image. However, the database creator may need to see the original document itself. For the reasons stated in this paper, databases of historical language materials should be constructed so that the relevant parts of original images or reprints can be easily identified. In order to confirm the original information of the database concerning the kanji, the information of the character and the place is necessary. The databases of old dictionaries, words of Chinese origin, Buddhist scriptures, and Chinese books can be connected by using these characters and the places where they appear as keys. By positioning kanji and kanji sounds in the various aspects of language life at the time and studying them as part of the history of language life, research on kanji and kanji sounds will make great progress with a more reliable breadth and multilayered nature.

Key words: database of Historical Sino-Japanese Readings, reproduction books, internet public images, original texts

キーワード：資料横断的な漢字音・漢語音データベース，複製本，インターネット公開画像，原本